



窓があると気づいたのは、つい先ほどコーヒーを淹れている時だった。朝のコーヒーを飲んでいると、見覚えのない窓が目飛び込んできた。

上がアーチ型になっている可愛らしいデザインで、白くて丸い取っ手がついている。青いガラスが嵌っており、外の風景は見えない。

どんな景色が見えるのか気になって、彼はアームチェアから立ちあがって窓を大きく開け放った。

新鮮な空気が一気に部屋へ流れ込んでくる。窓の向こうには、雑草が無精ひげのようにちょぼちょぼ生えた庭と、柵を隔ててどこまでも続く草地が広がっている。

庭を手入れすれば、見晴らしが良くなりそうだ。そもそも自宅にこんなスペースがあったことに、彼は驚きを覚えた。

外からの風に当たりながら飲むコーヒーは格別だった。草地なら誰かに寝起きの顔を見られる心配もないので、人目を気にせずにくつろげた。

本当に、どうしてこんな良い窓を忘れていたのだろうか？

彼は首をかしげた。最近どうにも変なことばかりが起きている。

始まりは家の白い壁に違和感を覚えた時からだった。

画家である彼は白い壁が嫌いだ。真っ白なキャンバスを思い出して、憂鬱な気分になるので、彼はいつも色に囲まれる生活を理想としていた。

多彩色の作品を特徴とする彼にとって、白は天敵だった。だから、身につける服やインテリアは派手な色を好んだ。人からみて多少悪趣味に思われても、彼は一向に構わず、好きなように周囲と自分を色で飾り立てた。

それなのに、自宅の壁が真っ白なのだ。外壁は仕方がないにしても、常に視界に入る内壁が白であるのは、彼には耐えられなかった。

何故、自分がこんな真っ白な家に住んでいるのか、どうしても理由が思い出せない。考えても答えは出なかったのに、彼は行動に出た。

すぐさま大量のペンキを買ってきて、彼は白い壁に自分の作品を作り上げていった。一階部分を埋め尽くすと、二階へも着手した。

だが、彼はそこでも変な出来ごとに遭遇した。自分の寝室に見慣れないベッドが並べて置いてあった。

昨夜までは確かにベッドはひとつしかなかったはずなのに。自分の勘違いだろうか？気分によって寝るベッドを変えてい

たと言われたらそうだった気もするし、彼には判断がつかなかった。奇妙に感じながらも、彼は寝室にもアートを施した。

書斎も、物置部屋も、作品を展示する部屋の壁ですら多彩色に埋め尽くしても、まだ部屋がひとつ残っていた。

最後に残った部屋を開けると、まるでデジャヴのようにまた奇妙な現象が彼を襲った。

部屋には絵本のような星とお花が描かれた壁紙が貼られており、ピンク色の可愛いデスクと、レースの天蓋がついた小さなベッドが置いてあった。足元には足首まで埋まりそうなほどフカフカな黄色のカーペットが敷いてある。

こんな部屋を自宅に造っただろうか？

子どもがいるわけでもあるまいし、ファンシーすぎる部屋に彼はひたすら首を傾げるしかなかった。親戚の子どものために造った部屋だろうか？

彼が記憶している中で、誰かがこの家に泊まりに来た覚えはない。

アトリエ兼住宅にしているので、子どもなど招き入れないと思うのだが。作品をめちゃくちゃにされる恐れがあるので、彼は子どもを家に入れたくないのだ。

何も塗らなくても部屋は色に溢れていたのだから、彼は部屋に何もせずドアを閉めた。

さて今度は庭の手入れをしようと、外に出ると窓のすぐ下に何かが刺さっている。屈みこんで眺めると、彼が大好きなアイスミルクバーの棒が十字に重ねてあり輪ゴムで固定されている。

アイスの棒で造った十字架？

酔った自分が造ったのだろうか？画家としてある程度の知名度があるというのに、何とお粗末な作品だろう！

彼は自分の作品に嘔き出した。しばらくあまりの幼稚なオブジェに腹を抱えて笑った。

こんな滑稽な作品は誰にも見られなくなかったので、足で十字架を倒すと適当に土に埋めた。すると土の下から一枚の紙切れが出てきた。どうせ領収書か何かを酔った勢いで埋めたのだらうと、無造作にズボンに突っ込んだ。

一時間ほど草むしりをして、彼は家の中へ戻った。夏の暑い日差しが容赦なく彼を照らし続けたので、汗をたっぷりかいていた。急いでアイスコーヒーを作り、喉を鳴らして飲み干す。

再びアームチェアに腰をおろして、彼は窓を眺めながら庭に何を植えようか考えた。色とりどりの花を庭一面に埋めたいと、彼は想像してにっこり微笑んだ。

ガサガサいていた紙切れを彼はズボンから取り出して、ぼんやりと眺める。窓からは夕日が差し込み始めていた。

紙の中には彼と、見知らぬ女性と少女が写っていた。女性は金髪の髪を一つに束ねた健康そうな小麦肌の美人で、少女はそばかすと白い歯がチャーミングだ。

良い印象を覚える人たちではあるのだが、彼女らにまるで覚えがない。どこで出会ったのだろうか？これは一体いつの写真だろう？

写真に写った自分を見ると、そんなに昔の写真ではないはずだ。

裏側に『ジョン、キャサリン a n d キャリー』と書いてある。画家として名前が売れている彼はサインを書くことがある。だがこの写真に書かれている文字はサインではない。

友人の家族、もしくは親戚の誰かだろうか？

遠い日の記憶を探ってみても思い当たる記憶はない。物忘れが激しいのは年のせい、作品づくりに没頭しすぎているせい。

彼は壁のカレンダーを見た。日付は七月二日。来年の五月三日までに、大きなサイズの作品を完成させなくてはならない彼にとって月日が流れる速さは驚異的なものがある。

アトリエにした部屋の床一面に広がっているカンバスは、まだほんの少ししか彩れていない。これを完成させることが彼の今の生きがいである。

月光が未完成なカンバスの白の上に、静かに降り立っている。

早く完成させて、美しくも忌まわしい白から脱出しなくては。彼は筆を握り、キャンバスに屈みこんで作業を開始した。

作品を作っている時、彼は幻覚を見たり幻聴を聞いたりすることが多々あった。今も何かボールの跳ねる音が響いてくる。

庭の方で誰かがボールを使って遊んでいるらしく、はしゃいだ声がある。

「マァマァ、ボールがね、ぴょんぴょん跳ねてるよ」

「ああ、もう。キャリー、気をつけてね。転ぶわよ」

パァンと何かを伸ばす音がある。白いキャンバスに濡れた真っ白なシーツを干している女性が見える。先ほど写真に写っていた女性だ。

彼女の足元で、写真に写っていた少女がボールを追いかけてまわしている。

「あなた、今日はいい天気よ。たまには外に出た方がいいわよ、そのうちペンキの匂いしかしなくなるわ」

笑いを含んだ声がすぐ耳元で聞こえる。

「ほら、はやく。ふふふ、お昼はテーブルを出して、お庭で食べましょうね」

「キャリー、お手伝いする！」

少女がキャッキョと手をたたいて喜ぶ。

女性と少女が笑いながらこちらに手をふる。ふたりの背後には見事な虹が空にアーチを描いている。

虹の下で笑う彼女たちは天使のように、あどけない顔をして誰かが来るのを待っている。

幻想が次から次へと真っ白なキャンバスに浮かんでは消えた。彼はそれらを見ながらも手を動かし続けた。

一体、彼女らは何者で誰に話しかけているのだろうと思ったが、全ては幻なのだから考えても仕方ない。

浮かんだ彼の疑問はあっという間に脳裏の下へと沈んでいく。

床の隅が少し黒ずみ始めているが、彼は気付いていない。

家の中は埃だらけで、彼が移動する部分しかフローリングの床は見えない。今日描いたはずの壁の作品たちは、色褪せてきている。コーヒーカップの縁が割れていた。見つけたばかりの窓の青いガラスには罅が入っている。

写真の中でさわやかに微笑んでいる小麦色の逞しい青年は、日焼けの代わりに皺としみを全身にまとい、毛髪は一本もなく、歯も乏しい数になっていた。

鏡を見ない彼は気付いていない。さわやかな青年であった自分の姿が変わり果てていることに。

カレンダーはもう何十年も七月二日から動いていない。

彼に作品を頼み、五月三日までに完成させてほしいと頼んだ画商の友人は十年前に死んでいた。

筆にポチャリと絵具を染み込ませて、彼は一心不乱に作品を仕上げていく。

現実には水にボサボサの筆を乱暴に突っ込んで、白いシートになすりつけているだけで、色などつくはずがない。彼の大嫌いな白だけが彼の目の前に広がっているが、彼は気付かない。

庭に妻子の死体が埋まっていることも、友人が死んだことも、絵を描けていないことも、自分がもうよぼよぼの年よりであることも、何にも気付かない。

画商の友人に作品を渡す五月三日を待ち続けている彼が、永遠にその日を迎えることが出来ない現実にも、やはり彼は気付かない。

彼は永遠に気がつかない。

May, 3

<http://p.booklog.jp/book/25735>

著者：森山

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/next7/profile>

表紙画像：戦場に猫《いくさばにねこ》様

<http://catinthedeath.web.fc2.com/index.html>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25735>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25735>